慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：津田正太郎著『メディアは社会を変えるのか：メディア社会論入門』世界思想社、2016年
Sub Title	
Author	山口, 仁(Yamaguchi, Hitoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.132- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：津田正太郎著『メディアは社会を変えるのか――メディア社会論入門』

世界思想社、2016 年

山口　仁

「メディア社会論」という分野

本書は「メディア社会論入門」という副題のとおり、メディア社会論に関する入門書・教科書として執筆されたものだが、筆者（津田正太郎氏）による“単著”であるところに大きな特徴がある。周知のように、メディア社会論（マス・コミュニケーション論、マス・メディア論、ジャーナリズム論、メディア文化論、メディア産業論、情報化社会論…といった様々な領域を含む）は社会科学、ときには自然科学をも含む複合的、学際的な領域である。さらにその範囲は時代を経るごとに拡大し、複雑化し続けており、教科書としてカバーすべき範囲もまた膨大な量にならざるをえなくなっている。

例えば、当該領域の代表的な教科書でデニス・マクウェールが単独執筆している『マス・コミュニケーション研究（原題は *Mass Communication Theory*）』は何度も版を重ねているが、そのたびにその分量が増えている。この本は翻訳もされているが、1985 年版（竹内郁郎ほか訳）が 300 ページに満たない“並”の分量だったのに対し、2010 年版（大石裕監訳）は 800 ページ超の“大著”になってしまっている。それほどまでにこの領域を学び研究する者にとっては、目を向けるべき対象が広がっているのである。

こうしたこともあって、メディア社会論の教科書は編著で書かれることが多い。例えば、ミネルヴァ書房の「やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ」や世界思想社の「学ぶ人のためにシリーズ」、有斐閣アルマなどはそういうコンセプトということもあるが、複数の執筆者によるものである。ただ自戒も込めて語ると、共同執筆の本というのは、何を取り上げるのか、どう構成するのかというだけではなく、編著者が全体のコンセプトを明確にし、執筆者の間でそれを共有していないと焦点の定まらない「情報の羅列」のような本が出来上がってしまいかねない。さらに執筆者の間で力量の差が、各章ごと内容や分かりやすさの差につながってしまい、読む方にとってはあまりありがたくないという結果にもなりかねない。

その点で、本書はあえてそういう“難しい領域”の教科書として出版されたというだけでも意味・意義があるといえる。特に「読書案内（221～225 ページ）」と「参考文献一覧（226～242 ページ）」はこの領域を学ぶ者にとって、どんな文献を読み進めていけばいいのかという貴重な案内となるはずである。初学者だけではなく、すでにほかの分野の研究者がメディア社会論に関心を持ったときに手にとる教科書としても価値があるだろう。

山口仁「書評：津田正太郎著『メディアは社会を変えるのか――メディア社会論入門』」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）132-134 頁

本書の構成

紹介が遅れたが本書は、「第 1 部　現代社会とメディア」「第 2 部　マス・メディアと世論」「第 3 部　社会問題とメディア」の三部構成になっている。第 1 部が社会とメディアに関する総論、第 2 部がいわゆる（マス・）コミュニケーションの効果・影響・社会的機能に関する理論・学説、第 3 部が社会問題とメディアに関する事例解説である。

従来の（マス・）コミュニケーション研究の教科書といえるのは第 2 部である。だが、その前段第 1 部では現代社会においてメディアを学ぶ意義について、国家、ナショナリズム・戦争、資本主義、都市についての議論に結び付けながら、かなりの分量を割いて解説している。こうした試みは昨今の高等教育（特に大学学部教育）においては非常に重要であろう。これは個人的な認識なのだが、大学でメディア研究を学ぶ学生のなかには「メディア研究 “だけ” を学び、社会学や政治学などの近接の社会科学には関心がない、学ぶ必要性を感じていない」という者が結構な割合でいる。これは「メディア学科」や「メディアコース」などとまるで特定の分野があるかのようにマーケティングしている大学にも問題はあるのだが、読者である学生に近接分野との関係を強く認識させるためには、本書のような構成は好ましいものだと思う。

もう一つの特徴は第 3 部で犯罪問題、貧困問題、排外主義、原発問題とメディア（報道）に関する事例解説の章を設けていることである。通常の教科書ならば、こうした章はそれぞれの分野の「専門家」が分担執筆するのが通例であるが、本書ではこれらの分野を津田氏が一人で網羅している。そうすることで理論や概念を使った「世の中の観察」の仕方を読者も実感できるようになっている。つまり道具としての理論や概念を複数の事例について実際に使ってみせているのが第 3 部である。通常、こうした箇所は専門的な学術書に掲載されていたり、教科書であればせいぜい逸話的に取り上げられていたりするものであるが、本書の事例部分は津田氏の普段の研究とも密接に関係しており、「道具の使い方を見せる」という点でもより高度なものになっている。知識というものはインプットするだけではなく、それを使って社会を分析するというアウトプットをしてこそ定着するものなので、このような箇所は読者にとっても有用であろう。

現代の大学教科書の問題点？

こうした点で本書は非常に「丁寧なつくり」になっているといえるし、独学向きであるともいえる。評者も分担執筆ながら社会学の教科書の制作に携わったことがあり、特に昨年末の教科書の原稿執筆段階では出版社の編集者といろいろ話す機会もあった。評者は、教科書とは授業で使うものであり、基本的な情報が「無味乾燥」な表現で記述されており、足りない部分は教員が授業の中で補足していくというものだと思い込んでいた。しかし昨今ではそういうスタンスのものは通用しづらいのだという。たとえば、表現は「です・ます」調で読者に語りかけるように、抽象的な議論は控えめにして事例中心の内容、見開き 2 ページではかならず節や見出しを入れること（！）などが求められるらしい。

こうした視点で本書を読んでいくと、昨今の教科書事情に誠実に寄り添っていることが分かる。もちろん津田氏が「ほかの教科書に頼って書いた教科書は面白くない（あとがきより）」という点を重視しているように、本書は豊富な読書量に基づいて書かれた中身のある教科書として仕上がっている。見せかけだけのフレンドリーな教科書ではないことは、教科書執筆に携わったこともある者が読めばすぐ分かるだろう。

以上のことを踏まえたうえで、あえて私見に基づく本書の疑問点を述べるが、そうした昨今の出版事情と津田氏の「サービス精神」が本書をある意味では分かりにくくしているのではないかと思うところがある。津田氏は「当初…本書を筒井康隆の小説『文学部唯野教授』のようなスタイルで書きたい（あとがきより）」と考えていたものの、その後でオーソドックスな教科書スタイルに軌道修正したという。ただ実際にはこれでも十分、講義で学生に語り掛けるようなスタイルになっている。たとえば、まるで博識のベテラン教員が受け持つ授業のように、たびたび本文中に様々な事例・エピソードが挿入されているが、それが読んでいると余分に感じることもあったのも事実である（これは評者がすでにこの分野に関して一定程度の基礎知識があるからそう感じたのかもしれないが…）。

もう一点、これも津田氏の誠実性の現れだとは思うのだが、メディア社会論を学ぶ理由についてのメタ的な解説が若干多い印象も受けた（はじめに「何のためにメディアを学ぶのか」、おわりに「何のためにメディアを学ぶのか、再考」など）。確かに、昨今のメディア環境を踏まえれば、こうした議論は必要というか、むしろ必須ですらある。ただそうした議論を「入門」とされる教科書で結構な分量を割いて展開している。評者には非常に興味深かったものの、初学者がこうした議論をする文脈をどこまで理解できるか疑問が残った。

これら二点は、津田氏の「サービス精神」と誠実性から生じたことだとは思う。ただこうした議論を教科書として、文章として、明示的に語るべきなのか、それとも「行間」に滲み出るものに止め、授業で口頭にて補うべきなのか。こうしたメタ的な内容は文章化しようとしても語り切れず零れ落ちるものがあるはずである。結局はバランス感覚の違いの問題なのかもしれないが、評者ならそうしたメタ的な議論は文章という形では自制しつつ、講義で学生に語りかける方を選ぶと思う。

こうした問題は現代の大学教科書の問題とも絡んでくるのだろう。「語りすぎ」「書きすぎ」「フレンドリーすぎ」の教科書が数多く存在する状況下では、上記の疑問点がこの本の内容面を棄損するものではないことは明白なのだが、著者の誠実性の現れについ反応してみたくなったのである（まさかこうした議論を読者や学生と交わすことまで想定して本書を書いているのだとしたらそれはそれで恐れ入ることではあるが…）。

（やまぐち　ひとし　帝京大学文学部）